

The Tale of Peter Rabbit における キリスト教図像学的考察

林 孝 憲

A Study of Iconology in *The Tale of Peter Rabbit*

Takanori HAYASHI

梗概

The Tale of Peter Rabbit の細部を観察すると、様々なキリスト教に関するシンボリックなイメージが認められることに気付く。それは本来、友人の子供に宛てた絵手紙であったものから出版を目的とした版へと改訂する際に、意図して書き加えられたものと推測される。本論では、キリスト教図像学の視点からこの物語を読み直し、聖書を中心としたキリスト教のモチーフが物語の構成に大きな役割を果たしていることを解明してゆきたい。

序

The Tale of Peter Rabbit は元来、一人の少年に送られた手紙の中の私的な物語（以下、「絵手紙」と記す）であった。その後、出版を目的とすることにより、更に物語が書き加えられ、現在我々が親しんでいる物語へと書き改められてゆく。この幸運な贈り物の受け取り主はノエル・ムーアといい、物語をしたためた手紙を送られた当時は5歳であった。ノエルは、物語の作者ビアトリクス・ポターが17歳の頃、彼女のドイツ語の家庭教師をしていた、生涯を通して友人となる3歳年上のアニー・カーター（結婚後、アニー・ムーアと改姓）の長男である。1893年9月4日付のこの絵手紙は、次のような書き出しで始まっている。

My dear Noel,

I don't know what to write to you, so I shall tell you a story about four little rabbits whose names were— Flopsy, Mopsy, Cottontail and Peter⁽¹⁾

病弱な友人の息子を励ますために宛てられた手紙とされているが、*The Tale of Peter Rabbit* には、ノエル少年に対するポターの何らかのメッセージが込められていると理解してよいだろう。ノエル少年は12月24日に生まれたことから、Noel Christian Moore と命名された。

ポターはこの少年のことを想う度、自ずとクリスマス前夜に生まれた病弱なノエルというイメージを頭に描いたであろうことが想像できる。ゆえに、新約聖書を中心とするイエス・キリストの物語が、*The Tale of Peter Rabbit* の着想となり、創作過程に影響を及ぼしているとの仮定も可能ではないかと考えられるのである。事実、計26ページの文章と27の挿絵からなる物語には、キリスト教に纏わるシンボリックなイメージが多数認められる。益田朋幸氏も1994年に発表した論文『ピーターラビットの「受難」』⁽²⁾や書籍『ピーターラビットの謎』⁽³⁾の中で、*The Tale of Peter Rabbit* とキリストの受難の物語を対応させて論じている。

そこで本論では、物語の進行に従って、キリスト教図像学の観点から *The Tale of Peter Rabbit* を読み解いてゆき、多くの人々に広く親しまれているこの子供のための物語が、キリストの物語を下敷きにして創作されたとの試論を展開してゆく。

1

1902年にフレデリック・ウォーン社から挿絵を彩色して出版された現行版（以下、「現行版」と記す）は、次の文章から始まる。

Once upon a time there
were four little Rabbits,
and their names were ——
Flopsy,
Mopsy,
Cotton-tail,
and Peter.
They lived with their Mother
in a sand-bank, underneath the
root of a very big fir-tree.⁽⁴⁾

まず4羽の子うさぎの名前に言及すると、各々いかにも愛らしく、動物の名前に相応しいものとなっているのであるが、ピーターだけが人間にも用いられる名前を付けられていることに気付く。人間の名前を使うことにより、主人公ピーターへの読者の感情移入を促す効果を意図したとも考えられる。1940年にミラー夫人に宛てた手紙⁽⁵⁾の中で、ポターは何故ピーターと名付けることになったのか分からないと述べているが、当時、ポターはピーターとベンジャミンという名前のうさぎを飼っていたことから、この2羽のうさぎが物語のモデルを務めたことは間違いないだろう。しかしキリスト教を信仰する者にとっては、ピーターとはその名

の示す通りキリストの12使徒の一人、ペテロを連想させるものである。⁽⁶⁾ 事実、先に挙げたミラー夫人への手紙の中に、教会で小さな少年からピーターはペテロのことなのかと尋ねられた経験があるというエピソードが書かれている。粗野ではあるが人間味もあり活動的で、最もキリストから愛されたペテロの人物像をいたずら好きな (naughty) ピーターラビットのキャラクターと重ねて見ることも不自然ではなからう。

次に、うさぎの親子が暮らすうさぎ穴であるが、非常に大きな樅の木 (fir-tree) の根元にあるとされている。樅の木はキリストの降誕の図でしばしば描かれる樹木であり、今日でもクリスマスを祝う飾り付けのツリーに用いられることから、樅の木をキリストの降誕のシンボルとする習慣が定着していることが窺われる。よって、樅の木の住家で生れたうさぎがキリストを暗示しているとの解釈が生れてくるわけである。

2

ある朝、お母さんうさぎは子うさぎたちに野原に行って、クロイチゴを採ってくるように言う。ただし農夫のマグレガーさんの庭には絶対に入ってはいけないと。そこは以前、子うさぎたちの父親が捕らえられ、マグレガー夫人によってパイにされてしまった場所なのである。子うさぎたち、特にピーターにおとなしくするよう教え諭すと、お母さんうさぎは夕食のパンを買いに出掛けて行く。

Then old Mrs. Rabbit took a basket and her umbrella, and went through the wood to the baker's. She bought a loaf of brown bread and five currant buns.⁽⁷⁾

ここで注目すべきことは、お母さんうさぎが買うパンに関してである。黒パン (brown bread) を1つと葡萄パン (currant bun) を5つ買うわけだが、黒パンは貧乏人が食べるパンとされ、黴が生えやすく、臭い息のもとになると言われている。問題となるのはもう一方の葡萄パンである。bun はキリスト教ではミサの儀式の際に用いる聖体用のパンであり、キリストの肉体を意味する。キリストと12人の弟子たちが最後の晩餐にこのパンを食べたことが、その由来とされている。また、葡萄はキリスト教では馴染み深いモチーフであり、これもまたキリストの血液を意味し、最後の晩餐でもパンと共に食卓に置かれた。この時、キリストの述べた「取って食べなさい。これはわたしの体である。」「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。言っておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」(マタイによる福音書26.26-29)⁽⁸⁾ は、あまりにも有名な言葉である。よって、葡萄パンは最後の晩餐を象徴するものと理解することがで

きよう。お母さんうさぎは最後の晩餐の準備のために買い物に出掛けるわけである。「絵手紙」にはこの場面は表されていない。

3

フロプシー、モプシー、カトンテイルの3羽は良い子うさぎで、お母さんうさぎの言い付けを守り、クロイチゴ (blackberry) を集める。クロイチゴはキイチゴ (bramble) と同様、死と妖精に関係があるとされ、食べることは一般的にタブーとなっている。また、棘のあることからキリストの茨の冠の材料の1つと考えられており、この先ピーターの身に降り懸かる受難を予感させる効果が認められる。⁽⁹⁾ 更に、添えられた挿絵を見ると、「絵手紙」にはないが、「現行版」にはクロツグミ (blackbird) がクロイチゴをついばむ姿が表されている。クロツグミは悪魔、冥界の神、不運、悪など不吉なシンボルを持つ鳥であり、キリストの受難とも関連付けられている。後に、マグレガーさんがピーターの上着と靴を案山子に着せるといった象徴的な挿絵の場面でもクロツグミは描かれている。

4

さて、いたずら者のピーターはといえば、一人、早速マグレガーさんの庭へと出掛けて行き、門の下をくぐり抜けて忍び込む。「現行版」の挿絵を観察すると、これもまた「絵手紙」には登場しないが、門をくぐったその傍らにピーターを待ち構えているかのようにヒイラギ (holly) が描き込まれている。ヒイラギも棘のある形状から茨の冠を作った木と伝えられ、赤い実はキリストの血、死に至る愛を表す。ピーターが自ら、受難の場へと足を踏み入れたことを示す象徴的な場面を暗示していると読み取ることができる。

5

ピーターは侵入した畑でまず最初に、レタス (lettuce) とフランス豆 (French bean) とハツカダイコン (radish) を食べ、食べ過ぎたせいで具合が悪くなったので、パセリ (parsley) を探してマグレガーさんの畑を歩き回る。

First he ate some lettuces and French beans; and then he ate some radishes; And then, feeling rather sick, he went to look for some parsley.⁽¹¹⁾

レタス、ハツカダイコン、パセリは、ユダヤの祭日の中でも最大で最古のものである過越の祭 (ペセハ) の食事に添え皿として出される祝宴特有の料理である。過越の祭の起源は「出エジプト記」に由来し、祭の間、ユダヤ人は荒野の厳しい生活を思い出させるような物を食

べ、出エジプトの奇蹟物語を朗読する。春の祭典とも呼ばれることから、これらの野菜は春や復活、救済などの意味を持つ。過越の祭はまた、キリスト教においても語り継がれている大きな意味を持つものである。いわゆる最後の晩餐は、過越の祭の第1日目のために催された食事であり、この時、キリストは弟子の裏切りとかの有名な例えで再度、弟子たちに自身の受難について語る。キリスト教徒にとって過越の祭は、最後の晩餐であり、聖餐式を示すことに他ならない。よって、レタスやハツカダイコンを食べるピーターの行為は最後の晩餐を催し、受難を迎え入れることを暗示させると考えられる。

更に挿絵⁽¹²⁾には、両手にハツカダイコンを握り締め、夢中で食べるピーターの傍らにシャベルが描かれ、その上には駒鳥 (robin) が止まっている。駒鳥にはキリストの受難に纏わる伝説が残されている。一説にはキリストに刺さった茨を抜き取ろうとして、また一説には、キリストの体を木の葉で覆った時に血にまみれ、その血がそのまま胸の赤い毛となり定着したというのである。この伝説から駒鳥は、キリストの受難のシンボルとしてしばしば引用されることの多い鳥である。シャベルの存在もキリストの埋葬を連想させ、受難が影を落とすつあることを思わせる場面となっている。「現行版」において他にも駒鳥は挿絵中に5度登場するが、「絵手紙」には1度も描かれていない。

6

パセリを探し歩いていたピーターは、キャベツ畑でついにマグレガーさんと遭遇してしまう。仕事をしていたマグレガーさんは鋤を振り上げ、ピーターを追いかける。

Mr. McGregor was on his hands and knees planting out young cabbages, but he jumped up and ran after Peter, waving a rake and calling out, 'Stop thief!'⁽¹³⁾

まずマグレガーさんの容姿から触れよう。挿絵⁽¹⁴⁾に描かれるマグレガーさんの顔は、長い頬髭と顎鬚をたくわえ、鷲鼻で帽子を被っている。黒い装いはしていないものの、どこか嘆きの壁に向かって呟くユダヤ人を思わせる容貌である。

マグレガーさんは畑でキャベツを植えていたのであるが、キャベツ (cabbage) は頑固なものとしるし、葡萄の木の大敵で二日酔いに効く、または利益といったシンボルを有する植物である。先にも述べたように、葡萄は古来よりキリストの象徴としてよく知られるもので、キャベツがその大敵とされるのであれば、キャベツから連想されるものの一つにキリストを死に追いやったユダヤ人を挙げることができるだろう。利益というシンボルも土地の所有や職業の制約を受け、苛烈な迫害による絶えざる流浪を強いられたために蓄財の執着を余儀なくされたユダヤ人と結び付くのではないか。ユダヤ人の職業として多くの人々が思い浮かべ

るものに高利貸しが挙げられよう。このようにマグレガーさんをユダヤ人の象徴と見なすことは、やや深い読みが過ぎるかとも感じられるが、一つの仮説として提示してみたい。

7

大変驚いたピーターは、庭中を逃げ回り、履いていた靴をキャベツ畑とジャガイモ畑でなくしてしまう。日本人の感覚では理解の難しいことではあるが、西洋では靴を脱がされることは恥辱につながる行為である。仮にキャベツをユダヤ人と関連づけるならば、キャベツ畑に残された靴は、ユダヤ人によって辱めを受けたキリストを象徴していると考えることができる。挿絵⁽¹⁵⁾にはピーターの靴に顔を寄せる駒鳥の姿が描かれていることから、やはりここでもキリストの受難を連想してしまうのである。

8

大急ぎで逃れはしたものの、ピーターはジャケットのボタンをスグリ (gooseberry) の網に掛けてしまい、身動きがとれなくなってしまう。

After losing them, he ran on four legs and went faster, so that I think he might have got away altogether if he had not unfortunately run into a gooseberry net, and got caught by the large buttons on his jacket. It was a blue jacket with brass buttons, quite new.⁽¹⁶⁾

スグリも棘のあることからキリストの茨の冠を連想させ、キリストの受難を示す。そのスグリの網に捕らえられたことは象徴的といえる。さて、ピーターが身に付けている物にも焦点を当てたい。ピーターは真鍮のボタンの付いた青の上着 (blue jacket with brass buttons) を着ている。青はキリスト教において一般的に、父なる神、三位一体、精霊を表す色で、神の熟慮、贖罪、謙譲、慈悲、誠実、敬神、希望、あらゆる超俗的なものを含意する。また、青は半ば喪に服していることを示す色とされている。絵画などにおいて、青の着衣を身に付けたキリストや聖母マリアの像がしばしば登場することは言うまでもない。真鍮は中世においては最も固い金属とされ、キリストの神聖を表していた。

更にキリスト教図像学では、ペテロはたいいてい青い長衣に金のマントを羽織った姿で描かれるとされている。このことから金色の真鍮のボタンの付いた青の上着という色の組み合わせは、ピーターラビット=ペテロという図式を示すものとも理解できる。

9

身動きができなくなったピーターを捕らえにマGregarさんがやってくるが、ピーターは上着を脱ぎ捨てて、間一髪のところまで逃げおおせる。道具小屋に逃げ込んだピーターは、とっさに置いてあったじょうろの中に飛び込み、身を隠そうとするが、じょうろの中にはたっぷりと水が入っていた。

And rushed into the tool-shed, and jumped into a can. It would have been a beautiful thing to hide in, if it had not had so much water in it.⁽¹⁷⁾

この場面をペテロのエピソードと対応させるならば、新約聖書にある「湖の上を歩く」や、もしくは『ヨハネによる福音書』のみに記されている「奇跡の漁り」が連想されるであろう。どちらの話もペテロが湖の中に入水するものであるが、とくに後者はとっさに水の中に飛び込むことから、ピーターとペテロの衝動的な性格の共通性が垣間見られる。両場面とも以下に引用する。

夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。弟子たちはイエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」すると、ペテロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」イエスが「来なさい」と言われたので、ペテロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。(マタイによる福音書14.25-31)⁽¹⁸⁾

既に夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。だが、弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった。イエスが、「子たちよ、何か食べる物はあるか」と言われると、彼らは、「ありません」と答えた。イエスは言われた。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ。」そこで、網を打ってみると、魚があまり多くて、もはや網を引き上げることはできなかった。イエスの愛しておられたあの弟子がペテロに、「主だ」と言った。シモン・ペテロは「主だ」と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ。(ヨハネによる福音書21.4-7)⁽¹⁹⁾

しかし、マグレガーさんには、ピーターが物置に隠れていることなど容易にお見通しであった。マグレガーさんが物置を探している最中、びしょ濡れのピーターは思わずくしゃみをしてしまう。居場所を見つかってしまい、慌てて物置を飛び出したピーターは、またもや辛うじて危機を脱する。すっかり怖じ気づいたピーターは、マグレガーさんの庭を脱出しようと、もと来た門を探して歩く。そして迷い歩くうちに池へとやってくる。そこでは白い猫が池の金魚をじっと見つめて静かに座っていた。ピーターは猫に声を掛けずにその様子を後ろから眺めている。

Then he tried to find his way straight across the garden, but he became more and more puzzled. Presently, he came to a pond where Mr. McGregor filled his water-cans. A white cat was staring some gold-fish, she sat very, very still, but now and then the tip of her tail twitched as if it were alive. Peter thought it best to go away without speaking to her; he had heard about cats from his cousin, little Benjamin Bunny.⁽²⁰⁾

この場面にはいくつかの暗示が読み取れる。まず金魚 (gold-fish) であるが、魚 (fish) は西暦3世紀末頃より、公認以前のキリスト教徒の集会場や礼拝堂となっていた地下墓地カタコンベの壁画にすでにキリストのシンボルとして描かれていた表象物である。もともとイエス・キリストと魚という言葉の表記が似ていたため、魚がキリストのシンボルとなったと伝えられているが、葡萄と並んで普遍的なキリストのシンボルとされている。また金 (gold) であるが、金はキリスト教において、神の霊や信仰の勝利の栄光を意味することから、金魚はよりキリストのシンボルとして相応しいものであると考えられよう。それを狙う猫はキリストの受難を表し、更にその情景を静観するピーターの姿は、キリストが逮捕され大祭司の所へ連行される様子を遠巻きに密かに見つめるペテロの姿を連想させる。この後、ペテロは3度の否認をすることになる。挿絵⁽²¹⁾では金魚は赤く血にまみれているようにも見える。

更に挿絵を詳細に観察すると、右端に蓮 (lotus) とアイリス (iris) が見て取れる。植物、特に花は聖母マリアの象徴物としてキリスト教絵画の中で多様な意味を持って描き込まれる。その代表格が百合 (lily) で、挿絵に描かれている蓮 (lotus) は別名、睡蓮 (water-lily) とも呼ばれ、百合の変種とされている。特に聖書における百合は、蓮のことを指しているともいわれている。百合は言わずと知れた聖母マリアの純潔を表す花である。1618年には、聖母の処女懐胎をテーマとする絵画に白百合を描くことを命じた教皇布告が発せられたほど密接な関連を持つものであった。⁽²²⁾一方、アイリスは我が子キリストの受難を悲しむ聖母のシンボルとされ、これもしばしばキリスト教絵画に登場する植物として知られている。一見何気な

い場面と思われるのであるが、実は周到なポターの作為が読み取れるわけである。「絵手紙」にこの場面はない。

11

ピーターは物置の方へ戻って行くと、鋤で畑を耕す音を耳にする。警戒しながら覗き見ると、マGregorさんが玉葱を掘っていた。そしてその向こうに門があるのを見つける。ピーターは全力で門をめがけて突進する。途中、マGregorさんに発見され追い掛けられはするものの、無事、門の下をくぐり抜け、ついに森へと逃れることに成功するのである。ピーターを逃したマGregorさんは、ピーターが置き去りにしていった上着と靴を案山子に着せる。

Mr. McGregor hung up the little jacket and the shoes for a scare-crow to frighten the blackbirds.⁽²³⁾

挿絵⁽²⁴⁾を見ると、キャベツ畑の中に案山子が立てられているその足元では、3羽のクロツグミが案山子を囲んで見上げ、更に駒鳥が右腕に止まっている。それぞれの示す象徴は前に述べた通りである。ポターがこの挿絵に磔刑のイメージを重ね合わせたことはほぼ間違いのないことであろう。キリストの受難、もしくはキリストと同じく皇帝ネロによって十字架に掛けられ殉教したペテロの受難を暗示させるものである。「絵手紙」にもこの場面は存在するが、クロツグミのみで駒鳥は描かれていない。また、案山子が立てられているのはキャベツ畑ではなく、場所は特定できない。

12

我が家にたどり着くやいなや、疲労困憊のピーターは、軟らかい砂の床に倒れ込み、寝入ってしまう。上着と靴を身に付けていないピーターの姿を見て呆れながらも、お母さんうさぎは元気のないピーターのためにカモミールのお茶をせっせとこしらえる。一方、良い子にしていたフロプシー、モプシー、カトンテイルはパンとミルクと黒イチゴの晩餐にありつくのである。

結び

以上のように、物語の進行に沿ってキリスト教図像学の観点から *The Tale of Peter Rabbit* を読み解いていった。*The Tale of Peter Rabbit* には意図的に仕組まれたものもあれば、無意識に表象されたものもあろうが、キリストに纏わるシンボリックなイメージが認められることはこれまで論じてきた通りである。動物を主人公にした子供のための絵本にキリストの物

語のモチーフを導入するといった発想自体が疑問視されるかもしれない。しかし、100年前のヨーロッパにおいては、キリスト教の教義や習慣は今日よりも遥かに人々の生活に密着しており、最も世代間の格差のない共通概念であったはずである。ポターがクリスマス前夜に生まれたノエル・クリスチャンという名の少年へ聖書に基づいた物語を贈ったとの仮説も現実味のないものではなかろう。既成の物語を新たな作品の底本とする創作過程は、イギリスではごく一般的なことである。シェイクスピアのほとんどの戯曲には、種本となる作品や実話が存在していたことはよく知られる事実であり、様々な文学作品において、その底本に言及する研究も盛んに行われている。吉田新一氏もイギリス人の現実に執着する特性を指摘し、ポターもその例に違わず、融通の利かないほどの現実主義的な人間で、絵を描く際には必ず対象を前にしなければならなかったと述べている。⁽²⁵⁾ゆえに、物語を作る過程でもポターが既成の文学作品や逸話に題材を求めたことは十分に考えられる見解である。

The Tale of Peter Rabbit に関しては、出版を目的とした段階から象徴的表現が意図的に作品の重要な構成要素として組み込まれたと推測できる。物語の原形である「絵手紙」と「現行版」とを比較すると、特に挿絵においてシンボリックなイメージの使用に差が生じていることが明らかに認められた。出版にあたって、ポターは物語の構造に多面性を持たせ、表現を豊かなものとするためにキリスト教をテーマにした企てを行ったのではないだろうか。

註

- (1) Leslie Linder, *A History of the Writings of Beatrix Potter* (London: Frederick Warne & Co, 1971), P.7.
- (2) 益田朋幸『ピーターラビットの「受難」』『比較文学年誌 第30号』(東京 早稲田大学比較文学研究室 1994年)。
- (3) 益田朋幸『ピーターラビットの謎』(東京 東京書籍 1997年)。
- (4) Beatrix Potter, *The Tale of Peter Rabbit* (London: Frederick Warne & Co, 1987), P.9.
- (5) *A History of the Writings of Beatrix Potter*, P.92.
- (6) 本論で言及する事物・事象の象徴的な解釈は、以下に挙げる参考文献を総合して行われたものである。
- (7) *The Tale of Peter Rabbit*, P.14.
- (8) 『聖書 新共同訳』(東京 日本聖書協会) 53頁。
- (9) *The Tale of Peter Rabbit*, P.16.
- (10) *ibid.*, P.19.
- (11) *ibid.*, P.P.21-22.
- (12) *ibid.*, P.20.
- (13) *ibid.*, P.26.
- (14) *ibid.*, P.24.
- (15) *ibid.*, P.28.
- (16) *ibid.*, P.30.

- (17) *ibid.*, P.37.
- (18) 『聖書 新共同訳』 28 頁。
- (19) 同上 211 頁。
- (20) *The Tale of Peter Rabbit*, P.46.
- (21) *ibid.*, P.47.
- (22) 阿部薫『聖書と花』(東京 八坂書房 1992 年) 114 頁。
- (23) *The Tale of Peter Rabbit*, P.53.
- (24) *ibid.*, P.52.
- (25) 吉田新一『ピーターラビットの世界』(東京 日本エディタースクール出版部 1994 年)。

参考文献

- アト・ド・フリース『イメージ シンボル事典』(山下主一郎ほか訳 東京 大修館書店 1984年)。
- E・H・ゴンブリッチ『シンボリック・イメージ』(大原まゆみ、鈴木杜幾子、遠山公一訳 東京 平凡社 1991年)。
- アーウィン・パノフスキー『視覚芸術の意味』(中森義宗、内藤秀雄、清水忠訳 東京 岩崎美術社 1971年)。
- 水之江有一『図像学事典——リーパとその系譜——』(東京 岩崎美術社 1991年)。
- 水之江有一編著『絵で見るシンボル辞典』(東京 研究社出版 1986年)。
- 若桑みどり『NHK人間大学 絵画を読む』(東京 日本放送出版協会 1992年)。
- 上田和夫『ユダヤ人』(東京 講談社現代新書 1986年)。